

センター長に就任して

As the Director of the Center for Historical Social Science Literature

外池 正治
TOIKE Masaharu

1989年6月に、森田哲彌教授の後を引き継いで、附属図書館長に就任するとともに、社会科学古典資料センター長を兼ねることになりました。本センターの所蔵する諸文庫や資料の世界に誇るべき価値については、本号で10号を迎える本年報の各号に、古典に造詣が深い執筆者によって記されていますので、浅学の私が繰り返すことは差し控えますが、そこで語られている先学が収集のために払われた多大のご苦勞に接するにつけ、これらの貴重書を維持していくと同時に、さらに一層の収集を行なっていく責任の重さに身が引き締まる思いです。

大川政三元センター長はその就任に当たり、本センターの所蔵する資料の世界的価値についてふれられ、学外利用者の増加という事実から、全学界のセンターとしての役割と貴重書の保全管理とをいかに両立させていくかを課題とされていますし、その後を引き継がれた川井健教授は、同じく就任の辞において、本センターが社会科学研究のメッカとして、日本のみならず世界のセンターの機能を果たすことを期待されています。

私としても、同様の課題と抱負を持っていることには変わりはありませんが、就任以来、その課題を解決し、抱負を実現するために必要な施設や予算に厳しい制約があることに直面しています。こうした環境の中で、これまで本センターの発展のためにご尽力頂いた歴代のセンター長、センター所属教授、助手、職員の方々から心からお礼申し上げますと同時に、それらのご努力を実らせるために微力を尽くしたいと考えています。

社会科学の新しい展開の中で学内外の期待に応えながら、古典資料の集中管理と高度利用というセンター本来の機能を、厳しい環境の中で果たしていくという極めて困難な課題を与えられているわけですが、少しでもセンターをあるべき姿に近づけようとして行なわれてきた諸事業を地道に積み重ねていくとともに、センター運営委員会でこれまで出されてきた数々の貴重な提案の具体的実現の方途を探りつつ、一層の議論を運営委員会で続けていく所存です。

最近において、この運営委員会の中で中心的役割を果たして頂いたのは古賀英三郎教授ですが、教授は3年の長きにわたりセンター併任教授として、ご多忙な研究・教育の仕事と並行してセンターのために多くの時間を割いて頂き、そのご労苦は筆舌に尽くし難いものがあったと思われま。先生のご貢献に改めて感謝申し上げますとともに、この度新しくお迎えする永井義雄教授と力を合わせながら、センターの運営に力を注いでいきたいと考えている次第です。

さて古賀教授は、第8回「西洋社会科学古典資料講習会」において、「古典の魅力」と題する大変魅力的な講義をされていますが、その中で古典の魅力として、独創性、全体性、批判性、そして根元性の4点を挙げ、古典は不滅であり、時代に応じて新しい光を放つことを諄々と説かれています(『同講習会講義要綱』1988年11月参照)。最近、社会科学の多様化、細分化の傾向が見られると同時に、総合化、学際化の必要も一層高まっていますが、このような時期にこそ、教授の指摘される魅力に満ちた古典にじっくり取り組ませる教育がとりわけ必要ではないかということ

が、キャンパス利用に関連して現在行なわれている前期教育のあり方についての熱心な議論に接するにつけ、強く感じられます。

前に述べましたセンター本来の重要な機能の一つである高度利用の一環として、古賀教授のいわれる「古典の魅力」をどのように学生に訴えていくかということも、今後のセンターにおける課題の一つであるように思われます。私の就任の直前に(1989年6月13日～14日)、センター運営委員会および関係者のご努力によって、前期学務委員会主催の「フランス革命200年記念講演会」に関連して、センター所蔵資料の展示会が小平で開催されましたが、今後も、場所や関係職員の負担などの問題をあわせて検討しながら、センター運営委員会の協力を得て、同様の試みを続けていければ幸いですと考えています。

私自身の前期教育における経験を述べることを許して頂きますと、前期ゼミのテキストとして、20年以上も前に出版されながら毎年版を重ねているイギリス近代社会経済史の英文基本文献を、ここ数年使用していますが、その内容は古賀教授のいわれる古典の魅力を備えているといってもいいものであるため、視点を変えつつ繰り返し読む度に得られる新鮮な発見を、自分の専攻する経済政策の生々しい現実照射させながら、社会科学的思考を学生の身につけさせる訓練を行なって参りました。

このような試みの過程で発見できましたことは、一橋大学に入ってくる学生の多くは、すぐれた潜在能力を有していて、それを引き出し実らせることができるかどうかは、大学側の教育の熱意と取り組み方とに大きくかかわっているという、ごく当然のことが一つです。もう一つは、たしかに彼らは時流に沿った敏感な関心を数多く持ち、それらがばらばらに切り離されているため、結果としては糸の切れた風船玉のような状態で浮遊している様子に見えますが、実は何とかそこから脱脚しようとして、古賀教授の指摘されるような魅力を持つ社会科学の古典とじっくり取り組む機会が与えられることを、大学に求めているのではないかということです。この場合の古典が単なる時代的古さだけを意味するのではないとすれば、前期ゼミの多くはこのような観点から行なわれているわけですので、その訓練を経たかどうかで、後期ゼミの出発点における歴然たる差が学生に見られることは、教官の誰しものが経験する事実でしょう。

また私が長年勉強してきました中小企業論についても、研究対象の変化に対応した多様な研究と多彩な見解が提出されてきていて、それ自体研究のあり方と内容を著しく豊富にしてきていることには間違いありませんが、同時にもう一つの大きな方向として、総合的視野を求めて歴史と古典への回帰と再検討が進展しつつあることも事実です。脱工業化社会、サービス化社会あるいは情報化社会といわれるような大きな社会経済的変動との関連で中小企業をとらえていくという試みの中で、かえって後者のような研究動向が注目されてきていることは、独創性、全体性、批判性、根元性をその底に有している古典が、時代に応じて新しい光を放つという先の古賀教授の指摘によって理解し得るものと考えます。

かつて特研究生として本学図書館への入庫が許され、飛び立つ思いで書庫の中に入ってあちこちの棚から直接書物を手にした時の喜びを、つい昨日のように思い起こしますが、何日もかかって探し当てた古典的資料の精読を研究の出発点とした身としては、同じ資料の多くが現在再び取り上げられ、新しい光が当てられていることに接して、なお一層、古典研究の重要性と本学図書館とセンターの所蔵する資料のすぐれた価値に思いを至している次第です。

このように見てきますと、最初にふれました本センターの機能に関する課題は、基本的にはわが大学のみならず、社会科学にかかわる内外の大学における研究・教育の課題との関連でと

らえる必要があるということになり、非力の私が到底こなし得る課題でないことは十分承知していますが、少なくとも気構えだけはこのような立場を持ち続けたい所存ですので、皆様のご協力を切にお願い申し上げます。